

シェリー 晩年の愛

——『ジェーンへ』の詩三篇を読む

松島 正一

(1)

一八二一年十月からシェリーとメアリー、ジェーンとウィリアムズの夫婦はピサのランゴ・アルゴの家に一緒に住むことになった。シェリー夫婦は五月初旬、夏を過ごすためにカサ・マニに移り、そこにウィリアムズ夫婦がお客として移ってきた。ウィリアムズ夫婦は友人のトリローニーのことを時々シェリーに話した。二十九歳であらゆる海をめぐって冒険生活を送った男で、ピサのシェリーやバイロンの仲間に加わりたがっているという。やがてトリローニーがやってきて、にぎやかになった。

この時期に書かれた『ジェーンへ 誘ふ』(“To Jane: The Invitation”)、『ジェーンへ 回想』(“To Jane: The Recollection”)、『ジェーンへ ギターをそえて』(“To Jane: With a Guitar”)のジェーンに捧げた三部作はシェリーの抒情詩のなかでもとりわけ美しい作品である。

この時期、例によってメアリーは妊娠していて、メアリーはシェリーに冷たかった。彼は妻がもはや自分を愛して

いないのではないかと疑い始めた。シェリーとメアリーの関係は、一八二二年一月二六日にエドワード・ウィリアムズに宛てた手紙の中の詩に明らかである。シェリーはウィリアムズ夫婦の「幸せな家庭」と自分たちの「冷たい家庭」を対比している。

この詩は全七連から成るが、詩はこう始まる。

The serpent is shut out from Paradise.

The wounded deer must seek the herb no more

In which its heart-cure lies:

The widowed dove must cease to haunt a bower

Like that from which its mate with feigned sighs

Fled in the April hour.

I too must seldom seek again

Near happy friends a mitigated pain. ("To Edward Williams")

蛇は楽園から閉め出された。

傷ついた鹿はもはや探し求めてはいけない

心をいやすハーブを。

夫を亡くした鳩は木陰に行くことをやめなければならぬ、

四月のころに偽りのため息をついて雄鳥に

逃げられたもののように。

ぼくもまた、再び求めてはならない

幸せな友のそばに、やわらげられた苦痛を。(「エドワード・ウィリアムズへ」)

シェリーは自分を「蛇」にたとえている。もちろんエデンの園の「蛇」を暗示しているが、この時期、シェリーはバイロンやピサの仲間たちから「蛇」と呼ばれていた。これは“Byshe Shelley”がイタリア語の “bischelli (=small snake)” と地口くちぐちになるからと言われている。

「ジェーンへの詩は一八二二年の冬から春にかけて執筆されている。当然のことながら、これらの詩は妻メアリには隠していた。七月にシェリーとウィリアムズのヨットは嵐のため転覆し、二人は溺死する。従ってこれらの詩が発表されたのはシェリーの死後であった。

シェリーの書くものには観念が優り過ぎて現実が希薄であるようにみえるものが多いように思える。様々な現実の経験を経て、おのれを成長させていくことが足りなかった。「ぼくは思想の人生よりは感覚の人生を求める」(“On for a life of Sensations rather than of Thoughts.”)と述べたのはキーツであるが、キーツの「感覚の人生」に対して、シェリーは「思想の人生」を選んだ。オクスフォードを追われ、生涯、追われているという意識。大学をきちんと卒業していたら、現在のシェリーはなかったと言えよう。S・スペンダーは「社会に出ていくまでに青年らしい考えから、とっぴな、時には悲劇的な結果をきたす振舞をなし、そのため、今度は他の人々から迫害を受けるといった段階以上に成長していただろう」と言う。E・ブランデンは「もしシェリーが生きながらえたらならば、彼はおそらく母校に帰ったであろう」と述べている。しかし、我々は体制に組み込まれたシェリーを見たくないのも事実である。

(2)

三部作を論じる前に『鋭い星が輝いています』(“*The keen stars were twinkling*”)の詩をみておこう。この詩について、シェリーはギズボーンにあてた手紙で「私たちは夏の月のもと、夕方の風のなかをこの楽しい浜辺にそって歩いていくと、大地は別の世界のようにみえた」と記している。歌と感情、歌う者と楽器で暗示される関係。歌の力がそれを聞く者の魂を揺らぶり、喜びを与え、この世ではない別の世界へと導いていく。全部で四連から成る詩はこう始まる。

The keen stars were twinkling,

And the fair moon was rising among them,

Dear Jane.

The guitar was tinkling,

But the notes were not sweet till you sung them

Again.

鋭い星々が輝いています、

そして星の間に美しい月が昇ってきます、

愛しのジェーンよ、

ギターは響いていたけれど、

その調べはあなたが歌ってはじめて

とても甘美になるのです。

「美しい」(fair)、「甘美な」(sweet)の形容詞はジェーンを飾るものとしてある。月とジェーンの声のアナロジー。ギターの魂のない調べに生命を与えるのはジェーンの歌なのだ。冷たい心のシェリーに対して、柔らかな光輝(splendour)を投げるジェーン、また、ジェーンの優しい声と魂のないシェリー、これらの対比が美しい。最終連はこれまでのものが一つの形、つまりジェーンへの愛へと収斂されていく。

Though the sound overpowers,

Sing again, with your dear voice revealing

A tone

Of some world far from ours,

Where music and moonlight and feeling

Are one.

音は圧倒するけれども、

もう一度歌ってくだらう、

優しい声で

シェリー 晩年の愛(松島)

音楽と月光と感情が一つである

私たちから遠いある世界の

音色を。

シェリーの死は不慮の死であった。彼が意識したかどうかは別として、彼にも晩年はあった。本論はその時期の恋愛詩を読んでみようという企てである。

(3)

『ジェーンに 誘ふ』（“To Jane: The Invitation”）は自然界のリズムと人間の生活の情緒的なリズムの間のアナロジーから成り立っている。「美しい日」は「荒々しい年」に微笑みにやってくる。「美しい日」は「美しいジェーン」の姉妹で、詩人の悲哀を癒すためにやってくるのだ。

Best and brightest, come away!

Fairer far than this fair Day,

Which, like thee to those in sorrow,

Comes to bid a sweet good-morrow

To the rough Year just awake

In its cradle on the brake. (1-6)

この上なくすばらしく快活な人よ、さあ行こう！

この美しい日よりはるかに美しい人よ、

この日は茂みの揺りかごで

ちようど今日覚めた荒々しい年に

あなたが悲しみにくれる人に送るような

楽しい挨拶をしに来たのです。

詩人は「美しい朝」がシェーンへの思いへと自分を連れていくことを意識する。

The brightest hour of unborn Spring,

Through the winter wandering,

Found, it seems, the halcyon Morn

To hoar February born.

Bending from Heaven, in azure mirth,

It kissed the forehead of the Earth,

And smiled upon the silent sea,

And bade the frozen streams be free,

And waked to music all their fountains,
And breathed upon the frozen mountains,
And like a prophetess of May

Strewed flowers upon the barren way,
Making the wintry world appear

Like one on whom thou smilest, dear. (7-20)

まだ生まれない春のもっとも輝かしい時間が
冬のあいだを彷徨いながら

このどかな朝が

霜の二月に生まれるのを見たのです。

空色の快活さのなかで天から身をかがめ

大地の額に口づけし

沈黙する海に微笑み

凍った流れを解放するのを命じ

すべての泉を目覚めさせて歌わせ

凍った山々に息を吹きかけ、

五月の巫子のよう^{みこ}に

不毛の道に花を撒き散らし

冬の世界をあなたが微笑みかけている
世界のようにしたのです、愛しい人よ。

「冬の不毛な凍った大地」と「詩人のわびしい状態」とのアナロジーが、「二月の穏やかな日々」と「詩人の経験の本性」のアナロジーへとつながっていく。自然のリズムと人間の生命のリズムの間のアナロジーの上にこの詩が成立していることがわかる。

詩人は都会の喧騒を離れて自然に向かおうという。そこは「人の心にこだまを呼び起こすといけないと思ってその音楽を抑える必要がないし、自然の技巧が心と心を調和させてくれるから」。家を留守にするので、こんな張り紙を出しておこう、と言っつ。

“I am gone into the fields.

To take what this sweet hour yields:—

Reflection, you may come to-morrow,

Sit by the fireside with Sorrow. —

You with the unpaid bill, Despair, —

You, tiresome verse-reciter, Care, —

I will pay you in the grave, —

Death will listen to your stave.

Expectation too, be off!

To-day is for itself enough;

Hope, in pity mock not Woe

With smiles, nor follow where I go;

Long having lived on thy sweet food,

At length I find one moment's good

After long pain—with all your love,

This you never told me of." (31-46)

「この心地よい時が与えてくれるものを

味わうために野原に出かけます。

「瞑想」よ、おまえは明日来て

「悲しみ」と一緒に炉端で座っていなさい。

おまえ、未払いの請求書を持った「絶望」よ、

おまえ、退屈な歌うたいの「心労」よ、

墓の中で清算してあげよう、

「死」がおまえの歌を聴くだろう。

「期待」も去れ！

今日は今日で十分だ。

「希望」よ、憐れみのなか微笑を浮かべて

悲哀を嘲るな。わたしの後をついてくるな。

長いことおまえの甘い糧に頼ってきたが、

ついに長い苦痛の後で、一瞬の安らぎを見い出す。

おまえの精いっぱいのお愛をもってしても、おまえは

この安らぎをわたしには決して教えてくれなかった」

『ジェーンへ』の詩を書いたシェリーは『エウガネイの丘に』(“Lines written among the Eugeanean Hills”)や『ナポリ近く失意のうちに詠める歌』(“Stanzas written in Dejection, near Naples”)などの、詩人における想像力の枯渇という主題を扱った作品の作者でもある。若い時にあった詩泉の輝きがおのれにはないという痛切なまでの自覚を歌っている。ワーズワスの『幼少期の回想から受ける靈魂不滅の啓示』(“Intimation of Immortality Ode”)がそうであるように、想像力の喪失が主題になるとはいかにもロマン派的である。

詩人は「この一日の光輝く姉妹よ、目覚め、起きて、そして来て下さい」とジェーンに呼びかける。冬の森と海の説明は自然描写であるが、自然全体はそれ自身の生を持っていて、その秘密は詩人にもはっきりとはわからない。まるで自然は統一と無時間の秘密を彼に暴露したようにみえる。シェリーのジェーンへの愛は欲望もほとんど伴わない非肉体的な愛であったはずだが、「森では松が樹液のない緑の葉と／太陽に口づけしたことのない幹にからまる／こげ茶色の蔦で花輪をつくっています」は、彼のジェーンに対する性的な願望を示しているようにみえる。

自然の森では、自然は縛られてもいないし、制限をされてもいない。昼と夜、冬と夏、大地と海原が出会い、一つ

のものに溶けあうようにみえる。自然の光景は無垢な関係、愛において出会い、相手を映し出す要素が溶けあうこともなく、触れることもめったになく、何も実を結ばず、香りも色も出すことがない。このような下での自然は、詩人と一緒になるようにもう一度シェーンを誘っても、結局は彼女に対するおのれの無垢を示すしか仕方がないのである。詩はこう終わる。

Where the earth and ocean meet,

And all things seem only one

In the universal sun.

そこでは大地と大洋が出会い、

あらゆるものは大いなる太陽のなかで

ただ一つに見えるのです。

(4)

『シェーンに 回想』(“To Jane: The Recollection”)の詩はシェリー自身が詩のなかで述べているように、「過ぎ去った栄光の墓碑名」である。シェリーは一八二二年二月二日の晴れた日、夫人メアリーとピサから松林を歩いて海岸まで歩いた。それにシェーンを誘ったのである。シェーンおよび周りの人たちは、この詩がメアリーの目につかないように配慮したようだ。

五連から成る詩で、こゝが始まる。

Now the last day of many days,

All beautiful and bright as thou,

The loveliest and the last, is dead,

Rise, Memory, and write its praise!

Up, — to thy wonted work! come, trace

The epitaph of glory fled, —

For now the Earth has changed its face,

A frown is on the Heaven's brow. (St. 1)

あなたのように美しく輝く

多くの日々の最後の一日が、

もっとも愛らしい最後の一日が去った。

思い出よ、起ってその称賛を記せ。

いつもの仕事につけ、さあ、

過ぎ去った栄光の墓碑銘を刻め。

大地はその表情を変え、

大空は眉をひそめているから。

シェリー 晩年の愛（松島）

この詩の主題はタイトルが示すように「過ぎ去った栄光」の思い出である。風景と一体になった詩人の幸福を詩の中で定着させる企てである。「眉をひそめた大地」は冬になった大地の描写であるが、妻メアリことであるのは明白である。

第一連は松林の遊戯である。

We wandered to the Pine Forest

That skirts the Ocean's foam,

The lightest wind was in its nest,

The tempest in its home.

The whispering waves were half asleep,

The clouds were gone to play,

And on the bosom of the deep

The smile of Heaven lay;

It seemed as if the hour were one

Sent from beyond the skies,

Which scattered from above the sun

A light of Paradise. (St. II)

私たちは大洋の泡が縁取る

松林へと彷徨った。

微風は自分の巢にこもり

嵐は自分の家にこもった。

ささやく波はなけば眠りこみ

雲はどこかに遊びに行き

深海の底には

天の微笑が映っていた。

まるでそれは時間が空の彼方から

送られた人のように見えた。

空は太陽のはるか天上から楽園の光を

撒き散らかしたかのように。

大空の「微笑」(smile)は第一連の洪面(frown)を想起させる。「私たち」は三人のはずなのに、二人で散歩しているように読み手に思えるのはその語り口にあるのだろう。

We paused amid the pines that stood

The giants of the waste,

シェリー 晩年の愛(松島)

Tortured by storms to shapes as rude
As serpents interlaced,

And soothed by every azure breath,

That under Heaven is blown,

To harmonies and hues beneath,

As tender as its own;

Now all the tree-tops lay asleep,

Like green waves on the sea,

As still as in the silent deep

The ocean woods may be. (St. III)

私たちは松林の中で立ち止まった。

松は荒野の巨人たちのように立ち

絡み合った蛇のように嵐で

荒々しく捻じ曲げられていた。

大空のもと

ささやかな風になだめられ

その風と同じくらい優しい

地上の調べと色に合わせていた。

そして、すべての梢は眠っていた、
海の緑の波のように。

物音ひとつしない海底の
海の森のようにひっそりと。

「絡み合った蛇のように捻じ曲げられた松」という性的なものを暗示する表現に驚く。森の静けさは鎖で縛りつけられていくようで、キツキが立てる音さえ静けさを強調する働きしがなく、呼吸する息も周囲の静けさを減じることはない。静けさそのものが偏在している。

There seemed from the remotest seat
Of the white mountain waste,
To the soft flower beneath our feet,
A magic circle traced, —
A Spirit interfused around
A thrilling, silent life, —
To momentary peace it bound
Our mortal nature's strife;
And still I felt the centre of

The magic circle there

Was one fair form that filled with love

The lifeless atmosphere. (St. IV. 41-52)

はるかに遠い白い山の

荒涼たる尾根から

足元に咲くかよわい花のところまで

魔法の輪が取り囲んでいるようだった。

一つの精気、おの懐く静かな一つの生命が

あたりいっばいに充満し

人間本性の葛藤に

一瞬の平和を与えていた。

そして、わたしはいつも感じていた。

この魔法の輪の中心が

生命のない大気で愛を満たしている

ひとつの美しい姿であることを。

「生命のない大気」とはメアリーのことで、「ひとつの美しい姿」はジェーンであることは言うまでもない。「魔法の輪」という語句が二度登場するが、「魔法の輪」の中心に居るのがジェーンであることも言うまでもない。さらに、

この語は『エウガネイの丘にて』の最終近くの四行を思い出させる。

And the love which heals all strife

Circling like the breath of life,

All things in that sweet abode

With its own mild brotherhood: (365-368)

すべての争いをなだめる愛は

生の息吹のように

あの甘美な住処のすべてのものを

優しい兄弟愛をもって囲むのである。

ところで、『ジェーンに 回想』の四五行から五二行は、最初の原稿ではこうなっていた。

A spirit interfused around

A thinking, silent life;

To momentary peace it bound

Our mortal nature's strife: —

And still, it seemed, the centre of

The magic circle there,

Was one whose being filled with love

The breathless atmosphere.

thinking, being, breathless など、ワーズワズを思わせるような語が用いられている。そして、thinking から thrilling, being から form, breathless から lifeless への変化は、抽象的なものから具体的なものへの変化と言える。また、ここに性的なものも感じさせられる。

最終連である第五連は、全五連のなかで最も長い。彼らは森の木立の水たまりの傍らに佇むと、その水たまりに地上と同じ森が映っている。その形も色も、地上の森よりもっと完璧な姿であった。「地上の世界では決してよく見えない心地よい眺めがあつた美しい緑の森（シユーン）への水の愛によって映されている」。地上と空との逆転の描写はみごとである。

そこに「嫉妬深い風」であるメアリーが忍び寄ってきて、「あまりにも忠実な心の目」である私シユアリーから「美しいシユーンの姿」をかき消してしまう。詩人は現実には引き戻される。詩人の心の安らぎは「長い苦痛」からの一瞬の休止にすぎず、シユーンがどれほど親切であっても、それは一時的なものにならざるをえない。

最後にシユアリー自身の名前が、イニシャルだが、登場して、詩は終わる。

Though thou art ever fair and kind,

The forests ever green,

Less oft is peace in S[helley]'s mind,

Than calm in waters, seen. (85-88)

たとえ、あなたがいつまでも美しくやさしく

森はいつまでも緑であって

シェリーの心のなかに安らぎが戻ることは

水の中の静けさよりまれである。

(5)

シェリーは音楽に堪能なジェーンのためにイタリア製のギターを買い、詩を添えて彼女に贈った。その詩が『ギターに添えて ジェーンへ』(“With a Guitar, To Jane”)である。

シェリーはシェイクスピアの『テンペスト』にならって、ジェーンをミランダと呼び、その夫エドワードをファエディナンドと名付け、シェリー自身をエアリエルに見立てた。『テンペスト』でエアリエルが若い夫婦をナポリまで送りどける役をシェリーは引き受けるのである。

When you die, the silent Moon,

In her interlunar swoon,

シェリー 晩年の愛(松島)

Is not sadder in her cell

Than deserted Ariel.

When you live again on earth,

Like an unseen star of birth,

Ariel guides you o'er the sea

Of life from your nativity. (23-30)

あなたが死んだら

あとに残されたエリエルは

洞窟のなかで気絶している沈黙する月よりも

悲しむことでしょう。

あなたが再び地上に生きるとき

目に見えない誕生の星のように

エリエルは人生の海の上のあなたを

誕生のときから導きます。

「目に見えない誕生の星のように」とあるが、個人はそれぞれ個人の気質と運命を形成する誕生の星の影響下にあり、という占星術の伝説による。また、『マタイによる福音書』（二・一〜二二）のキリストの誕生を示す星を見て、ベツレヘムにやってきた東方の三博士の話の思い出す。ジェーンの場合は彼女が再びこの世に生まれることがあっても、

その時それを知らせる屋が見えることはないだろうから、エアリエルが導き手になろう、と言っているのである。
後半はギターの由来が語られる。アペニン山脈の険しい山腹で切り倒された一本の木から作られたギター。そのギターを作った名匠は「ギターに問いかける全ての人に穏やかな言葉で答える」ことを教えたのである。

For it had learned all harmonies
Of the plains and of the skies,
Of the forests and the mountains,
And the many voiced fountains;
The clearest echoes of the hills,
The softest notes of falling rills,
The melodies of birds and bees,
The murmuring of summer seas,
And pattering rain, and breathing dew,
And airs of evening; and it knew
That seldom-heard mysterious sound,
Which, driven on its diurnal round,
As it floats through boundless day,
Our world enkindles on its way. — (65-78)

なぜならこの楽器はすべての諧調ハーモニーを学んでいたのです。

野と空の

森と山々の

多くの声を持つ泉

丘に響くこの上なく澄んだ木霊

小さい滝の優しい調べ

鳥や蜂メロディの旋律

夏の海のさざめき

音を立てて降る雨や息づく露

夕方のそよ風の音を。それはまた

めったに聞かれない天上の音楽を知っていた。

我々の地球が毎日の運行において

果てしない昼間の空をわたる際に

生み出す音楽を。

それはこれらすべてを知っているが

楽器に宿る精霊にうまく答えられない人には

何も語らないでしょう。

‘driven on its diurnal round’は、ワースワスのルーシー詩篇『眠りが私の霊を封じ込めた』の「日々廻る大地の
動きのなかで回った」(‘Rolled round in earth’s diurnal course’)を思いつかせた。
昔ちいへ終むる。

All this it knows, but will not tell
To those who cannot question well
The Spirit that inhabits it;
It talks according to the wit
Of its companions; and no more
Is heard than has been felt before,
By those who tempt it to betray
These secrets of an elder day:
But, sweetly as its answers will
Flatter hands of perfect skill,
It keeps its highest, holiest tone
For our beloved Jane alone. (79-90)
それは奏楽者の才能に応じて
語るのです。それを誘惑して

過ぎし日の秘密を暴露させる人によっては
すでに感じている以上のことを
聞くことはできないでしょう。

しかし、それは完璧な技巧を持った人には
この上なく甘い答えを返すので

最も高貴で、最も神聖な調べをとっておくのです、
われらの愛するジェーンだけのために。

一八二二年七月一日、シェリーはウィリアムズと共にハント一家を出迎えるため「ドン・ジュアン」号でレグホンに向けて出航した。七月八日帰りの航海の途中、嵐のためにヨットが転覆して、二人は溺死した。十七日にウィリアムズの、十八日にシェリーの死体が海岸に打ち上げられた。シェリーの異常に大きかった心臓は三時間燃え尽きなかったといわれている。その後、死体は一八二三年一月二十一日、ローマのプロテストメント墓地に葬られた。

メアリーとジェーンは未亡人となった。トレロニーはメアリーに結婚を申し込んだが、メアリーは断った。ジェーンはシェリーの旧友であったホッグの結婚の申し出を承諾したが、いざ結婚という時になって、実はウィリアムズとは正式に結婚していたのではなかったと告白した。二人は別れることなく、生活をともに二人の娘をもうけた。

（付記）シェリーの詩の引用は Thomas Hutchinson (ed.), *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* (Oxford, 1961) による。